

パウロは現在の自分の境遇について語り始めます。パウロが逮捕され投獄されたことは福音の働きに対し大きな障害になると考えられます。しかし、パウロは全く反対のことが起きていると言います。それは、パウロが捕らえられたことは、かえって福音を前進させていると言うのです。また、パウロが捕らえられたことは、他の人々を萎縮させるのではなく、大いに励ましたというのです。このことにより、多くの神殿と様々な宗教が雑居するエフェソで、キリスト信仰が話題となり、キリストを宣べ伝える活動が一段と活発になったのです。

しかし、その中にはパウロに対抗する活動もありました。彼らは「ねたみと争いの念にかられて」(15節)、「自分の利益を求めて」(17節)活動しているのです。「自分の利益を求めて」との訳は、岩波訳のように「党派心から」と訳す方が適切だと思われまます。しかし、パウロは、たとえそれが党派心からなされる宣教であっても、キリストが告げ知らされているのだから、それを喜ぶと言います。パウロの宣教は決して自分の力だけによるものではなく、彼のために祈るキリスト者の祈りと、苦難のときに寄り添うイエス・キリストの霊の力に支えられており、この投獄という状況は最後には自分の永遠の救いという結末に至るものであることを自覚しているので、喜びをもってこの状況に立ち向かうと言うのです。

パウロが切に願い、希望しているのは、自分が生きるにしても死ぬにしても、自分の身に起こることを通してキリストが大いなる方とされることなのです。このような境地が、21節で端的に表現されます。「生きるとはキリスト」とは、人間として生きる意義とか価値、また生きる力の一切がキリストにあるということです。自分のために死に、復活させられ今も生きて共にいるキリスト、自分の内に生きているキリストが、自分にとって生きることそのものだということです。そして、「死ぬことは利益なのです」と言います。死ぬことは肉の身体を脱ぎ捨ててキリストとさらに深く一つになることなので、「死ぬことは利益だ」と言うのです。「死ぬことは利益」とは「生きるとはキリスト」の一面なのです。

そして、パウロは生きることも死ぬことも望ましいので、生と死の板挟みになっているということです。パウロ自身の望みによれば、この世を去って、キリストと共にいる方がはるかに望ましいのです。他方、信徒の利益からは、肉に留まる方があなたがたのためにもっと必要ということになるのです。パウロは後者の確信が強いため、結局はキリスト者たちと共にこの世に留まり、彼らのために働くことになるのです。キリストは既に私たちと共におられて、私たちはキリストの復活の命にあずかり、その命に生き始めています。生きるにも死ぬにしても、私たちは永遠にキリストと共に生きるのであり、キリストを誇りとし、キリストに結ばれた者と共に、喜んで歩んでいくことが出来るのです。